

六 廿 化



1

俳句雑誌りつか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

い行く年と来る年に膝正しけり
ろ 炉端から雑煮の匂ひしてきたる
は 羽を持つものにあまねく初御空
に にここにこと賀状読み上ぐ媼かな
ほ ほつれ髪直す小指や初鏡
へ 竈をねこの取り合ふお元日
と 投扇興一見さんはおことはり
ち 縮緬で肌をごしごし初湯かな
り 龍の絵の正月凧を天井に
ぬ 抜け駆けを見破られたり絵双六

る 瑠璃色に鎌倉海老の跳ねにけり
を をみながら屠蘇回り来る初点前
わ 若水に柄杓の音の青々し
か 火事ありし二日の空の崩れそむ
よ 夜の瀬戸船笛ながく去年今年
た 高みから正月凧の糸を吐く
れ 連名の賀状ではもうなくなりし
そ 反りゐたる歌留多を挟み広辞苑
つ 爪剪湯などと洒落こむ七日かな
ね 猫よりもけふは寝ねけむお元日

な 成 木 責 梨 の 大 莫 迦 十 八 年
ら ラ チ オ から お ら が 春 なる 一 茶 の 句
む む か う 傷 歌 留 多 の 罰 に 貫 ひ け り
う 映 り ゐ る 星 を く づ さ ず 若 井 汲 む
い 猪 首 なる を さ ら に 猪 首 に 年 始 客
の 熨 斗 つ け て 大 羽 子 板 の 飾 り あり
お 追 羽 根 の 屋 根 に 島 風 吹 き は じ む
く 来 島 は 潮 を ゆ る め ず 大 旦
や 玄 孫 の 目 背 に 吉 書 を 揚 げ に け り
ま 繭 玉 や ぼ ぼ ぼ と 水 の 飛 ぶ ご と く

け 芥子粒のごとく高みへ初鴉
ふ 踏み込める指に気合を初稽古
こ 声上げて誰か呼びゐし初寢覚
え 越年のこと片隅に初日記
て 転々としたくともせず去年今年
あ 荒風のけふは息継ぎ初景色
さ 差し金に紙漕ほどなる注連飾
き 桐下駄の鼻緒が軽し初詣
ゆ 湯けむりに溶けゆく年を送りけり
め 目利から貫ひし棗初点前

み湖に日の差しきたる恵方かな
し舌をもて猫元日の手を洗ふ
糸縁側も義長の灰被りぬし
ひ昼過ぎの渴きに年酒引き寄せぬ
も燃え残るどんどの熾を人去らず
せ狭さうに弟子の集まる年賀かな
ず住み慣れしことこそめでた寝正月

※今月は新春恒例「いろは詠み」にしました。いろは歌には様々な説がありますが、柿本人麿が暗号にして詠んだのではないかという説が面白いのでそれを信じます。

鶺鴒の尾を振る水の暮れにけり 藤生不二男

せきれいのおをふるみずのくれにけり ふじおふじお

一本の流れとなれり下り鮎

ことり忌や紅葉且つ散る倚鹿寺

畦にゐて畦を見てをり曼珠沙華

寝転べば空の垂れ来る芒かな

鶺鴒は秋の季題。主に水辺に住み、長い尾を上下に振る習性がある（ただしイワミセキレイは左右に振る）。英名も（Wagtail）から来ており、石を尾で叩くように見えるので「石叩」とも。年中人家近くに夫婦で現れる親しみのある鳥で秋は特に目立つ。その動作は嫁鳥の古名があり神代にはイザナギ・イザナミの「みとのまぐはひ（婚姻）」の道を鶺鴒が尾を振って教えたとある。秋の夕暮れ、尾を振る鶺鴒の影が水に映り、ふと神代の昔に引き込まれるような魅力がある。リズム格調共に言葉が整って句姿が美しい。

秋深く静かなひと日過ぎ行きぬ 筒井八重子

あきふかくしずかなひとひすぎゆきぬ つついやえこ

台風の過ぎたる虫の集きけり

秋日影尾を振りながら犬静か

台風の過ぎし西空赤く染む

朝涼や尻尾押さへて乳搾り

俳句を飾らない八重子さんらしい作品。「静かな」と秋は即きすぎて平凡であるが、陳腐でないのがいい。この作品から少し離れるが、求めても平凡を手に入れることは難しい。さまざまな試練の荒波を越えてきてこそそのご褒美。今、ここにこの手に入れた平凡な日々への感謝がにじんだ淡水のような作品。「静かな」とは穏やかなことでもある一方、寂しいことも含む。静かな秋のひと日を主人公と共に振り返り味わうことができるのだ。

雪 卿 集

流 木

梶浦玲良子

立待の化粧ととのへ松並木
落城のいきさつ知らず草紅葉
八月の駱駝客待つ長まつげ
流木の過ぎし歳月あきあかね
はぢらひの色となりゆく吊し柿

夕 月

志方章子

夕月や雲の切れ端かと思ふ
隣室の小さき物音夜長人
熊蟬の相手の蟬を蹴落す
幼稚園の方が楽しい夏休
入院を明日にひかへて月さやか

せつ じゆ しゆう
雪 樹 集

幟

オレンヂの星空になる金木屋
芒原白き一本目立ちけり
御神燈整へられて秋の暮
準備待つ白きテントにちちる鳴く
残されし幟の赤き秋の朝

出口

誠

湖

溝 渕 弘 志

足許に如露傾け菊人形
石榴の実見上げて通る親子かな
紅葉より真赤な服を着てをりぬ
鯉跳ねて紅葉崩すや庭の池
帯なして湖に浮く紅葉かな

蛩雪譚 六甲

一月号選後に

立待の化粧ととのへ松並木

梶浦玲良子

「立待」とは立って待つ内に昇ってくる仲秋の月のことで一七夜の月。十五夜から望月、宵待ち月、居待ち月と一日ごとに月が出てくるのが遅れるのでそのように言う。十五日の円かな月とはちがい風情を楽しむ向きには喜ばれる。それは約二十六日後の後の月（十三夜）を楽しむ心に繋がっていく。掲句は秋になって松の手入れが行われることを踏まえて、化粧（手入れ）のおわった松が立ち待ち月にふさわしいではないかと愛でているのである。

落城のいきさつ知らず草紅葉

城址に佇んでいると、落城のいわれのある城の運命や経緯を詳しく知らないが、草紅葉の色が戦で流されたであろう武士（もののふ）の流した血。武士ばかりでなくにわか戦士としてかり出された近隣の農夫の悲惨な最期にも連想を巡らす。戦の多くはまず庶民や若者が犠牲になる。その図式は今も変わらない。

八月の駱駝客待つ長まつげ

八月は暑い。そんなとき砂丘観光に行く人はよほどに物好きか、過去に砂漠旅行をした思い出のために行く人。客の来るのを駱駝も首と睫毛を長くし待っている。駱駝のよだれもながーい。

(以下略)

六花集

校	好	物	初	大	高	晚	杉	古	噉	あ	は	花	土	縁
長	き	語	時	海	み	鐘	木	や	道	と	る	蕎	器	あ
の	な	書	雨	を	よ	や	立	し	稻	だ	か	麦	の	り
訓	こ	き	湖	肘	り	は	の	ろ	刈	し	な	の	落	て
示	と	き	面	枕	鳴	や	ぼ	野	る	の	る	光	ち	得
や	老	た	に	に	の	と	り	分	音	チ	花	り	ゆ	度
胸	い	ま	影	す	声	も	幡	の	や	ヨ	野	の	く	せ
の	ま	る	さ	す	ふ	り	う	呻	そ	キ	越	中	し	こ
赤	で	式	す	根	る	け	つ	く	ば	で	え	に	こ	と
い	可	部	初	浮	日	る	秋	琵琶	の	別	来	墓	り	爽
羽	る	初	紅	御	和	秋	秋	語	し	れ	て	地	秋	や
根	文	紅	葉	堂	か	明	時	花	秋	し	火	拓	の	か
	化	御	堂	人	な	雨	雨		の	秋	口	く	声	に
	の	釣			り				夕	跡	く			

江
見
巖

菊
谷
潔

平
居
濤
子